

## 心學に就て(二)

瀧本誠一

### (一) 心學の名稱

心學は道學とも云ふ、通俗には心學道語と聯結して稱するを例とす、漢學者が心法の學、心性の學、性理の學、窮理の學(單に理學とも云)又格物知致の學など唱へたるは、皆此の心學のことである。

支那にて心學と云ふ名稱は何代に何人が唱へ出したことか知らざれども、恐らくは宋代に始つたものであらふと思はる、世上一般には宋の朱熹を以て心學の元祖であるとして居る様で、明の王弘齋と云ふ朱學派の人は、朱子心學錄なるものを編纂し、其の自序に於て「晦菴朱先生之學其心學矣乎」と云つて居るのである、然し朱熹自ら心學なる語を使用したかどうかは未だ朱子の全集を悉く涉獵したることなき淺學なる我輩どもの知らざる所なれども、現に南宋の眞西山は其の大學衍義に心學以「主靜」爲「本」と云ひ、又林駟の源流至論にも心學の目あるを見れば、宋末元初の頃には既に多少使用されつゝあつたことは明白である、然れども宋元の儒者は多くは性理の學、窮理の學若くは道學など、稱し、心學の語は餘り多く使用しなかつた様なれども、明に至りて一般に此の稱呼を採用したるものゝ如し。

我か日本に心學の語を誘入したるものは何人なるか、是れ亦た我輩の確と知らざる所なるも、中江藤樹全書の處々に斯の語の散見し居るを觀れば、此の時代の學者間には、聖人の學問を總て心學と稱し、殊に藤樹一派の學者は、世上に於て一般に心學者を以て目せられ居たると見へ、現に全書卷七藤樹が某氏に答へたる書中に「拙者とても世間には心學者と申すと承候、初學のときは心得違にて自ら招きたることにて候得共、近年は心學の名、同心に無<sub>レ</sub>之候、道學なれば學にてこそ有べく候へ、何れど名付けても偏倚するは非なり」と云へるに徴すれば、彼が初學のとき、即ち年少時代には自ら心學を表榜して居つたらしく思はれ、又此の文句に依れば彼れは心學の語の穩當ならざることを覺り、それよりは寧ろ道學と稱する方を是なりとするものゝ如くなるも、それにも拘はらず彼は終身心學の語を使用しつゝあつたと見へ、其の卒去の<sup>1)</sup>前年即ち丁亥（正保四年）春の著作とせらるゝ翁問答中に心學を能く勤むる賤男賤女は書物を讀ますして讀むなり」云々と云つて、明かに之を使用して居つた證據がある。<sup>2)</sup>故に此の語は矢張江西の道學者の口に出てたるものにあらざるかと推測さるゝのである、藤樹の卒後二年、即ち慶安三年に出版したる心學五倫書なるものあり、此の著者は何人なるや署名なしと雖とも、後來心學者の云傳ふる所に依れば、藤樹の門人熊澤了介の著作なりと云へり、我輩は其の果して然るや否を詳かにせざるも、書名に心學の稱呼を冠したるは蓋し之を以て嚆矢とすべし、而して此の五倫書は石田梅巖以後の心學書に比すれば、多少の相違なきにあらざるも、通俗的に平假名文を以て五倫の道を説き、天道、明德、誠、敬の教を本とし、天照太神の神徳、釋迦如來の功徳を賛するが如き純乎たる心

1) 慶安元年(戊子)四十一歳にて卒す

2) 全書卷九の四十六枚

3) 藤樹卒去の四年前其の門人山田某に與へたる書中に山田子遊於原之門用其力於心

學の旨趣に符合せざるはなし、乃ち此の書の著者は良し了介にあらずとするも何人か江西の流を吸むものゝ手中に出でたること疑ひなきが如し、故に日本に始めて心學の稱呼を誘入したるは藤樹なりと云へば、當らずと雖も遠からざるを知る。

## (二) 學說ノ傳來及要領

心學者の云ふ所に依れば、心學の系統は、三代より孔子に傳はり、孔子より子思孟子に及び、それより宋の周茂叔程明道伊川を経て朱子に至り、遂に日本の石田梅巖に傳はりたるものなりと云へり此の言固より取るに足らざるも、彼等の主張する所は皆支那の聖賢の語を祖述敷衍したるものにして其の主なるものは舜が夏の禹王に位を譲らんとするとき、人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中と戒められたる語を取り、又は孔子が易を述られたるとき、窮理盡性至命と云はれたるの言に依り、若くは又子思が中庸に於て天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂教と云はれたる語、并に孟子に盡其心者知其性也、知其性則知天矣、と云ひ、又學問之道無他、求其放心而已と云へるか如き古語を標的として、之を解釋的に祖述敷衍したるに過ぎるのである。

支那に於ける宋儒の心學、即ち所謂の道學若くは性理學など、唱へたるものも、矢張斯くの如き聖賢の語を色々と解釋して、事六つかしく説き立てたるものにして、日本の心學は全くそれを學んだのである、乃ち茲に宋儒の説の一端を示せば、先づ第一に朱子學派は孟子性善の説及放心

4) 上河淇水の心學脉傳圖を見るべし

5) 説卦傳

を求むるの説を執つて、其の學説の根據となし、心を以て絶對のものゝ認め、惟心無對と云ひ、又心は本來完全之物と云ひ、又心は身之主宰、性は心之道理など云つて、心と理（道理又は天理と云）と全然同一のものとし、所謂主宰者即是理也、不<sub>下</sub>是心外别有<sub>二</sub>個理<sub>一</sub>、々外别有<sub>二</sub>個心<sub>一</sub>と説きて、心と理とは二つのものにあらざることを論ずるが故に、朱子の學は之を心學とも云ひ又理學とも云ふのである、朱子は又中庸の説を解釋して天命之謂<sub>レ</sub>性、即此心也、率<sub>レ</sub>性之謂<sub>レ</sub>道、亦此心也、修<sub>レ</sub>道之謂<sub>レ</sub>教、即此心也、以至<sub>下</sub>於致<sub>二</sub>中和<sub>一</sub>、贊<sub>レ</sub>化育、亦只此心也、致<sub>レ</sub>知即心知也、格<sub>レ</sub>物即此心格也云々と述べて、人間の行爲の根本は、皆心にありとし、道心常に爛々として明なれば（物欲に蔽はれざれば）一體は羈束を須ひずして自ら規矩に入るものとなし、人間は生れながらに有する性命の本然、即ち徳性に復へればそれで聖人とならるゝと云ふのであつて、之を換言すれば放心を求むるのが聖門に入るの道であると論斷するのである、故に爲<sub>レ</sub>學須<sub>二</sub>是求<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>其初<sub>一</sub>、求<sub>レ</sub>全<sub>下</sub>天之所<sub>二</sub>以與<sub>レ</sub>我者<sub>上</sub>始得<sub>レ</sub>と述べて、赤子の心の有りのまゝなるを良心として、其の初に復へるべきを主張するものなれば、之を稱して復初の説とも云ふ、而して朱子は又大學にある格物致知の説を解釋して格物致知、乃是即<sub>二</sub>事物上<sub>一</sub>、窮<sub>二</sub>得本來自然當然之理<sub>一</sub>、而本心知覺之體、光明洞達、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>照耳と云つて、學問の要は理を窮むるにありとし、理を窮むるとは人に即て之を云へば、心を窮むるのである、心を窮むるとは心を識ることである、然らば心を識るとは如何なることかと云ふに、それは識<sub>レ</sub>心乃欲<sub>レ</sub>識<sub>レ</sub>此<sub>二</sub>心之義理精微<sub>一</sub>耳と説き、心の義理精微を知らざれば善惡が分らないと云ふのである、心の義理精微を識るには或は靜坐と云ひ或は持敬と云ひ心を

6) 朱子心學錄卷五  
7) 同上  
8) 同上

靜肅にして懼れ愼みて、各々其の本心に省みれば、自然と悟道の域に入るべしと云ふのである、即ち之を約言すれば本心を常にしかと保つて居つて放さぬ様にせよと云ふに過ぎないのである。

朱子と同時に陸象山と云ふ人あり、此の人の學説は多少朱子と異なる所あるも、矢張同じく本心を主とするの學問に従事し、大同小異の説を唱へたりしが、此の人の學脈を傳へて別に一派を開きたるは、明の大儒王陽明である、陽明は朱子と並び稱せられて、孔孟以後の儒宗と仰がる人なるが、此の人は良知を以て學問の標的とし、毎に門人と學を論するときは無善無惡之心之體有善有惡之意之動、知善知惡是良知、爲善去惡是格物の四句を提唱して立教の規範となし<sup>9)</sup>て所謂の知行合一の學を主張したるは、朱說窮理の論と聊か合はざる所あるも、要するに陽明も亦心を盡すを以て學問の要旨とし、萬事の主宰は唯た一つの良心にありとするの説に外ならざれば歸する所は朱王共に心學の範圍を脱することは出來ないのである。

加之ならず朱王の學は共に多く佛老の説に基つきたるものである、兩派の學者は力を極めて其の然らざる所以を辯するも、遂に佛老の臭味を離脱すること能はざるは、其の所説の明證する所である、朱學の大家を以て推さるゝ李退溪は王氏の學を譏り、王陽明之學出於象山、而以本心爲正宗、蓋皆禪學也と云ひ且つ其初亦只爲厭事物之爲心害、而欲去之、願不欲滅倫絕物、如釋氏所爲、於是創爲心即理也之說、謂天下之理、只在於吾內、而不在于於事物……然則所謂事物者、雖如五倫之重、有亦可、無亦可、剗而去之亦可也、是庸有異於釋氏之教乎哉云々と論して痛く王氏を排斥したるは、必ずしも失當にあらざるのみならず、王氏の學の

9) 王龍溪語錄に據る

10) 王學辨集六枚目

11) 同上七枚目

釋氏に異ならざること洵に李氏の説の如しと雖も、何ぞ知らん、李氏が王氏の創爲として攻撃したる心卽理也之説は、前頁に記するが如く、明かに李氏の辯護しつゝある朱子の創爲にして、彼は身の主宰たる心は、卽ち理にして、心外に理なし、理外に心なしと説き、這道理（單に理とも云ふ）不是外來物事、只是自家本來合有底、只是常々要二檢點<sup>13)</sup>と論しつゝあつて全く王氏と其の説く所を同ふするにあらずや、然らば王氏の學の釋氏に異ならざるは朱子の學の釋氏に異ならざると同一にして、王氏の學が釋氏なれば朱子の學も亦釋氏である、太宰春臺曰く心性理氣之談胚<sup>14)</sup>胎於子思、萌<sup>14)</sup>芽於孟子、而後長<sup>14)</sup>大於宋儒、則與<sup>14)</sup>佛老<sup>14)</sup>同<sup>14)</sup>其歸、何足<sup>14)</sup>怪哉……宋儒之道倣<sup>14)</sup>佛者十八九、倣<sup>14)</sup>老者十一二云々と論、矯激に似たりと雖も、亦必ずしも據る所なきにあらざるを知る、我か日本の心學者が儒佛を打して一丸となし、之に加味するに神道を以てして、所謂る三、教一致の説を唱へたるは抑も亦故なきにあらず。

日本に心學の傳來したるは勿論朱註四書<sup>15)</sup>か渡來したる以後のことなるべし、或は北條及足利兩氏時代に於ても既に宋儒の道學を講明し居たるものなきにあらざりしなるべく、夫の俗間に弘法傳教兩大師の作として傳へらるゝ實語教若くは承久年間順德帝の天覽を賜はりたりと稱せらるゝ和論語など、果して其の通のものならんには、此等が心學書の嚆矢ならんも知る可らざるも、それは勿論甚だ疑はしきものであつて、眞に心學の行はれ出したるは朱註四書の渡來したるよりづつと後の事にして、確かなる所は徳川氏の初代藤原惺窩林羅山などか朱説を唱道したる頃より始まりたるものならんと思はる、鶯峰文集に本朝古來博士講<sup>レ</sup>經者、皆據<sup>レ</sup>漢唐詰訓、未<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>程朱道

12) 三五頁  
13) 朱子心學錄卷一  
14) 讀大疑錄

學一也、五十年前家君(林羅山を指す)始講論語集註於京師、以述聖賢性理之旨、於是學者得窺宋儒之說云々とあるは少しく家學に私するの嫌なきにあらざるも、兎に角宋儒の道學は此の時代より漸く盛に行はるゝに至りしことは我輩の辯を待ざる所である、然れども其の後間もなく中江藤樹出て、頻りに陽明の説を唱へ、續きて又山崎闇齋なるもの現はれ、朱説に我か日本の神道を加味したる一種の道學を主張し、皆各々門戸を張つて、盛に性理の學を鼓吹したることなれば後來所謂心學の淵源は之を惺窩羅山の如き朱子學派に歸すべきか、藤樹等の陽明學派に歸すべきか、將又闇齋一派の朱説兼神道の道學に歸すべきかは我輩の容易に斷言し能はざる所なるも、從來一般に傳へらるゝ所に依れば我か日本に於ける心學の元祖は藤樹及其の門人能澤了介であると云ふのであつて、而かも其の説は成る程度に於て事實の真相を得たるものと云はざる可らず、乃ち藤樹及了介は闇齋の如く御幣を眞甲に振り翳して高天原を説かざりしも、矢張他の朱子學派に比較すれば彼等の學説は餘程神道臭くして、漢儒に不似合の言多く、殊に藤樹の如きは「我朝の神皇の象と唐土の聖人の言と符節を合せたるか如し……故に神道に深き者は儒道をからでも心法明かに政教備れり」<sup>16)</sup>など云つて大に神道を贊成し、其の著書中に於て屢々斯くの如き旨意を洩しつゝあるは世人の知る通りの事實である、而して此の點に於ては了介も亦其の師と同しく神道の鼓吹者であつて、彼か著作として傳へらるゝ三輪物語及三社詫宣之註<sup>17)</sup>と題する短篇を見れば歴然として彼が神道臭き學説を唱へつゝあつたことは明かである、加之ならず此の兩人は其の著書中に往々佛徒を譏るか如きことあるも、其の實彼等は宛も朱王兩氏が口に釋氏を排斥し乍ら内

16) 藤樹全書卷六の神道大義の章

17) 元祿板橋生雜記卷之三

實は大に之を採用するか如く、佛説を徹底的に排斥せざるのみならず、却つて大に之を尊重し居たることは是亦彼等の著書に徴して疑なき所である、現に藤樹は其の人に與へたる書翰の中に「成佛得脱と釋尊の教玉へるも此心にて御座候」と云ひ、又「佛の後生一大事と教玉ふも今生の心を明にさせん爲にて候大乘の法門は皆此の心得にて御坐候朝夕を圖り難き浮世に御坐候得者心の内の如來を拜し玉はん事何より以て大切なる事に御坐候」と云ひ、「又佛法をも起し儒道も行はれ道並ひ行れて相害すること有るまじく佛も實すたれ儒も眞かくれ候故に争もある事なり」と云ふが如き言辭あるのみならず、彼か著作の一つなる「春風」と題する短篇中には「正眞の佛法なれば心の學問なり」と明かに斷言して居るのである、此等の所説に依つて之を見れば藤樹は自ら辯解して斯く申せば三教一致の様に候へ共儒佛と大に別なるものにて」云々と述べたるも彼が學説は矢張或る程度までは確かに三教一致であつて、江西の一派は同様に皆此の學風を保持するものなれば、後來公然と三教一致を標榜して活動せる石田梅巖一派の心學が江西の心學に淵源すると云ふは必ずしも失當にあらざるべしと思はる。

18) 全書  
19) 同上  
20) 同上  
21) 同上  
22) 同上

書之老母  
書之老母  
書之老母  
書之老母  
書之老母

牛原氏老母書  
與中川氏書  
答某氏書  
初篇卷六  
答某氏書